木村文輝 愛知学院大学学長に聞く

「ブランド力を高めたい」。愛知学院大学（本部・日進市）の学長に就任した木村文輝氏は、同大の評価を上げていくことが優秀な学生の集うキャンパスに繋がり、教員による教育、研究の質を高め、ひいては職員の協力で学生の就職率もアップすることができると話す。インド哲学を修めた木村氏は仏教の教えを説き、真のコミュニケーションは心と心の対話であると指摘。また、同大は２年後に創立 150 周年という記念すべき節目を迎える。木村新学長に任期の４年間に目指す目標、抱負を聞いた。

（聞き手は塚本隆・本誌編集長）

塚本編集長　就任おめでとうございます。率直なご感想を。

木村文輝学長　身が引き締まる思いですね。大学は少子化などを含めて厳しい環境の中にあります。任期後に向けて大学の基盤、方向性を作っていくことになりますから、その意味ではまさに責任重大だと思っております。

ー貴学をどうリードしていきますか。抱負をお聞かせください。

木村学長　具体的な方針はまだ決めていませんが、大まかに申しますと、愛知学院大学に対する評価、つまりブランド力といったものを高めていくことに尽きると思います。それによって優秀な学生が集まれば、先生方のやる気も出てきて、教育並びに研究に力が入ると思います。当然、このことが本学の評価を高め、結果的には就職率もアップするでしょう。ですから、まずはブランド力の向上が大きな目標になります。そのために何ができるのか、ですが、学生が１万 2000 人いて、教職員も含めればかなりの数になります。私自身の経験からも、現場の教員、職員はいろいろなアイデアを持ってるはずです。学生たちも、この大学がこうなったらいいのにという思いをたくさん持っているでしょう。思いがけないような魅力溢れるアイデアを、教職員、学生には是非、こちらに届けていただきたいですね。もちろん、不可能なものもあるでしょう。しかし、やはり自分の思いを聞いてもらえるということは、充実感にもつながる非常に大切なことだと思います。

ーまずは現場の声を聞くことから始めたいということでしょうか。

木村学長　そうですね。大学とは少し離れますが、東日本大震災以降、注目されているのが「傾聴」です。仏教系の宗教者たちが力を入れたのがこの傾聴活動でした。災害で苦しい思いをされた方は、ともすれば辛さを抱え込んでしまい、結果的にそれが精神的なストレスになって体調を崩してしまう。だからこそ、苦しんでいる被災者に寄り添って話を聞くことで辛い思いを吐き出してもらい、それによって前向きな気持ちになってもらうというのです。大学も同じことで、いろいろな思いを持っていながら聞いてもらえないということは、やる気を失ってしまう大きな理由になります。何を考えどんな理想を持っているのか。学生や教職員が執行部に対して自由に意見を言うことができれば、必ずやよい波及効果が生まれると思うのです。

ー貴学の魅力発信の課題は何でしょうか。

木村学長　総合大学という魅力を十分に生かしきれていません。日進と名城公園にキャンパスが分かれていて、総合大学であることのメリットがうまく機能していないと思っています。また、日進の広大なキャンパスには使われていない空間がたくさんある。これをどう使うのか。そこにはすごく大きな可能性が秘められていると思いますし、名城公園では、建物の中から官庁街を見下ろしつつ授業を受けられます。これは、ユニークな立地のキャンパスならではだと思います。そして楠元と末盛キャンパスは歯学教育のリーダーシップをずっと発揮してきたところです。それぞれのキャンパスの持っている優位性、可能性を最大限引き出していくことが課題ですね。

―貴学の建学の精神「行学一体」「報恩感謝」について改めて教えてください。

木村学長　根本的なことを言えば、仏教とは何か、ということです。仏教系の大学ですので、１年生には必修で宗教学の授業を行っています。仏教とは本来、人が生きていく中で、いかにして苦しみを減らし、いかにして自分の人生を充実した幸せなものにすることができるのかを説く教えです。 具体的に何を楽しいと感じ、何を苦しいと考えるかは個人個人で違います。そうだとすれば、自分自身はどうすれば幸せになれるのかをしっかりと考え、それを実行する。実行すればそこから知恵が出てきます。その知恵を改めて行動に取り入れる。これが行と学の相互依存「行学一体」です。同時に、普段から自分のことと同じように他者のことを考え、他者を支えていけば結果的に自分が困った時には他者に支えてもらえる。これが「報恩感謝」ですね。

―講義は座学が中心ですよね。

木村学長　大学の学問は教室の中での座学が基本ですけれども、やはり本物を体験することも極めて大切です。例えて言うならテレビ番組の「開運！なんでも鑑定団」です。これぞ本物だと思ってお宝を買っているはずなのに、番組では偽物だと言われてしまいます。なぜか。大きな理由は数多くの本物を見ていないからですね。本物を数多く見た人は、直感的に偽物がわかるものです。その直感は現場でなければ養成できません。教室では体験できないのです。実物を体験することと、教室の中での座学をバランスよく行っていくことが重要で、その点では実学系の学問とも共通するかもしれませんね。

―２年後の２０２６年に創立１５０周年を迎えます。どう臨みますか。

木村学長　記念事業の大きな枠組みの中では歯学部の新北館（仮称）の建設が進められていますが、それ以外に大きなことを行うのは難しいかもしれません。しかし、教職員、学生の意見を聞きながら、採用できるものは採用していきたい。いろいろな形で未来へ向けての布石を固めていくチャンスととらえて、その方向性を明確にしたい。いずれにしても、皆さんの知恵をお借りしながら考えていきたいと思います。